

A. グレーゼルの「図書館員論」について

石田俊郎

1 はじめに

情報科学の急速な発展により図書館界にも大きな変革がもたらされた。その最大のものは、図書資料を検索するための目録カードがパソコンを使ったOPAC（オンライン閲覧目録）へと進化したことであろう。図書館の扱う資料も、従来の手に取って読める本や雑誌だけでなく、ウェブ（World Wide Web）を通じて全世界のネットワーク情報がパソコンの画面に表示されるようになった。本の目録情報だけでなく、その本のページそのものがパソコン上で読める時代になったのである。このような変革の時代にあつては図書館員にも当然、新たな使命が期待されるであろう。

古代エジプトのアレキサンドリア図書館で蔵書目録を編纂したカリマコスをはじめとして、それぞれの国家・文化のなかで図書館が生まれ、司書や学芸員が活躍してきたと思われるが、図書館員という職業が公に認められてきたのは、18、19世紀になってからであろう。その間、図書館員のあり方についてもさまざまな論が生まれてきたであろうが、特に、有名なものとして19世紀ドイツ、ドレスデン王立図書館長エーベルト(F. A. Ebert, 1791-1834) 1) の『司書の自己修練(Die Bildung des Bibliothekars)』2) がある。エーベルトはバイエルン王立図書館のシュレッティンガー(Martin Schrettinger, 1772-1851) (後に副館長) 3) との論争(保存第一のエーベルトと速やかなる整理・利用のシュレッティンガー) 4) で有名であるが、エーベルトの歯に衣を着せぬ辛辣な批評は、読む者に厳し過ぎるの感を持たせるものでもあった。それから80年を経て、ゲッ

チンゲン大学図書館のグレーゼル(Arnim Graesel, 1849-1917) (後に館長代理・第二館長) によるシュレッティンガー擁護の言にはホッとさせられるものがあった。「表現においてはじょう長に流れ、内容の面からも、必ずしも矛盾なしとはしないまでも、出版に長期を要しただけのことはあつて、説明については十分に意が尽くされ、(ために初学者に対してはかっこうの書物である)」5) の情理兼ね備えた批評を読み、さらにグレーゼルについて調査したところ、河井弘志氏によるグレーゼルの伝記「A. グレーゼルの生涯」6) の論文記事、及び、グレーゼルの著書『図書館学ハンドブック(Handbuch der Bibliothekslehre)』7) の存在を知った。そのハンドブックの第2章第1節「一般的な図書館員」を読み、適切にまとめられているので、これを紹介しながら、現代の図書館員にも必要なもの、もはや時代遅れの感があるもの、さらに今こそ必要とされる特質について触れたいと考える。

2 18-19世紀のドイツの大学図書館

グレーゼルの図書館員論が生まれる背景となった、当時の大学図書館の状況は、現代の大学図書館とは全く異なっていることを認識しておく必要がある。大学の規模については「1789年にドイツには35の大学があつた。学生数は7900人であり、その40パーセントは4つの大きな大学(ハレ、ゲッティンゲン、イエナ、ライプツィヒ)に集中していた。」8) これは機械的に計算すると4大学は1大学平均790人となる。また「図表1: 19-20世紀におけるヨーロッパとアメリカ合衆国の学生数の変化(単位は千人)」9) によれ

ば、1870年代のドイツの学生数は13000人であり、1789年のデータから類推すると1大学1000人前後であろう。また図書館職員については「当時人文科学系の卒業後の進路の一つとして図書館勤務があった。言語学専攻生に特にその傾向が著しいことは先にみた。多くの学生は臨時職員として図書館に入り、勤務のかたわら研究をすすめ、研究職、教授職に入る機会をのくるのを待っていた。それはあくまで一時的な勤務にすぎず、その限りで、更に上位の教職あるいは官職を狙う者にとっては最良の待機・準備の場であった。」¹⁰⁾ 1878年グレーゼルが図書館補助職員に採用されたハレ大学図書館(Kgl. Universitaetsbibliothek zu Halle)の場合、職員編成は次の通りである。

館長(Direktor)

副館長(Stellvertretende Direktor)

第一司書(Kustos)

第二司書(Kustos)

第一書記(Amanuensis)

第二書記(Amanuensis)

記名員(Signator)

補助職員(Hilfsarbeiter): 7名 11)

3 グレーゼルの図書館員としての経歴

グレーゼルはライプツヒ大学、ゲッティンゲン大学で言語学を学び、1870-71年は普仏戦争に出征。1876年ストラスブルグ大学で古典言語学と歴史学を学んだ上で1878年ハレ大学図書館に補助職員として採用された。グレーゼルが図書館員となったのは29歳とかなり遅く、その後の大学図書館での活動について前述、河井氏の「A. グレーゼルの生涯」により、簡単に紹介したい。

1883年第二司書に昇格し、正職員となる。

1884-91年 グレーゼルを採用したハルトヴィッヒ館長は図書館専門雑誌“Zentralblatt fuer Bibliothekswesen (図書館中央雑誌)”(以下、

ZfBと略す)を創刊し、グレーゼルは編集スタッフとなる。この仕事により図書館業務全般に通じるようになったと考えられる。

1890年“Katechismus der Bibliotheken-lehre (図書館学入門)” / Julius Petzholdt. - Dritte Aufl. - 1877. を改訂して、“Grundzuege des Bibliothekslehre mit bibliographischen und erläuternden Anmerkungen (図書館学の基本的特質: 書誌及び解説付き注)” / Arnim Graesel. - Leipzig: Weber, 1890. を出版。河井氏によれば、高齢のペッツホルト(Petzholdt)から出版社を通じてグレーゼルに改訂出版の要請があったようである。¹²⁾

1891年ベルリン大学へ移り、図書館第三司書となる。同年10月シカゴ万国博覧会・図書館展のアメリカ部の担当を命じられる。これにより雑誌編集の仕事とともに、さらに英米図書館学の影響を受けたようである。

1894年第三司書(Kustos)から上級司書(Oberbibliothekar)へ昇格。

1899年ゲッティンゲン大学へ赴任。

1900年ハレ大学図書館ハルトヴィッヒ館長の雑誌ZfBの別冊“Blaetter fuer Volksbibliotheken und Lesehallen (民衆図書館と読書ホール広報)”の編集を委ねられる。大学図書館員のグレーゼルには公共図書館まで踏み込んでいくのは、かなりの負担があったのではないかと推察される。

1902年第一上級司書に昇格し、事実上の副館長となる。

先の“Grundzuege (基本的特質)”の改訂版を『ハンドブック』として、同じWeber社から出版する。

“Handbuch der Bibliothekslehre (図書館学ハンドブック)” / Arnim Graesel. - Leipzig: Weber, 1902.

1903 年 1 月ゲッティンゲン大学図書館長ジャツツコ教授急逝。グレーゼル館長代理となる。

1903 年 3 月ピーチュマン教授（ベルリン王立図書館部長）館長就任。

1905 年”Fuehrer fuer Bibliotheksbenutzer（図書館利用者のための利用案内）” / Arnim Graesel. – Leipzig : Weber, 1905.を出版。

1908 年館長代理(Vertreter des Direktors)、かつ、第二館長(Zweiter Direktor) となる。

1909 年 Professor の称号を与えられる（講義なしの教授職、待遇は正教授）。

1914 年退職

1917 年 5 月 27 日 68 歳の生涯を終える。

4 一般的な図書館員：『図書館学ハンドブック』第 2 章、第 1 節 13)

グレーゼルはこの節で、高名な図書館学の先輩諸氏の言を引用しながら図書館員の特性について説いている。

< 図書館員に要求される特性 > その重要度や性質によりいくつかのグループに分けられている。

第 1 グループ：最も重要な特性として次の 3 つを挙げている。

①秩序愛(Ordnungsliebe)

・博学であっても、この特質を欠いている図書館員は、図書館の目的からは全く役に立たない。

②勤勉さ(Fleiss)

・図書館業務では、他の場所ではあり得ないような根気のいる「勤勉さ」を、退屈至極な事柄でも要求されるものである。

・天性の労働意欲、労働の喜びの発露としての倦むことのない勤勉さは、この職業についての純粋で真実の愛情の如何にかかっている。

③人間愛(Humanitaet)

・真の人間愛や親切なサービスは、疑いもなく図

書館の目的達成への原動力である。

・職務上、利用者に対して、しばしば大きな犠牲を求めることがあるが、それが快く受け入れられるためには、人間愛だけがそのやり方を可能にする。

第 2 グループ：図書館員の素質

④記憶力(Gedaechtnisse)

・天性の図書館員に備わっている抜群の「記憶力」。業務で発生する様々の事柄を把握するために常にメモをとるようでは、「大変、残念な人物」である。

⑤判断力(Urteil)

・健全で自立した「判断力」を持たねばならない。分類目録の作成や図書等の新規購入の場合の選択の際に重要となる。

⑥知識・学識(Kenntnisse, Gelehrsamkeit)

・現代では、図書館員はもはや博識家ではあり得ないが、広く、根本的な「博識」を備えていたい。

・「百科事典的な知識」を備え、人類の知識のそれぞれの分野に同じ敬意と関心を持てれば、収書における偏向が避けられる。

・本質(Wesen)、部分(Teile)、境界(Grenzen)に関する基本的な知識と学問における様々の共通点(Beruehrungspunkte)を知ることが望ましい。

第 3 グループ：個別的な学問・技能

⑦語学(Sprachkenntnisse)

・ギリシャ語、ラテン語の代表的な古典が読めること。

・フランス語、英語、イタリア語は文献が読める程度の知識。

・その他のヨーロッパの言語は、文法書や辞書の助けを借りて見当がつけられる程度の知識。

・ヘブライ語は表面的ではあるが、ある程度は理解できるレベル。

・その他の東洋諸語については、特に要求しない。

規模の大きな図書館には素養のある職員が配置されているからである。

⑧歴史(Geschichte)

- ・図書館の属する国の全体的な歴史と個々の特定分野の歴史。
- ・国家的な構築物の成立、隆盛、衰退に関する文献的な歴史研究も不可欠。

⑨文学史(Litteraturgeschichte)

- ・文学史の全体像を理解する。
- ・図書館がその歴史的な容器である「学術史」の研究も不可欠。

⑩古文書学(Diplomatik)・古書体学(Handschriftenkunde)・書誌学(Bibliographie)

- ・これらの学問についての善き理論的な予備知識を備えていることが重要。
- ・実際の専門教育は、館内の写本・図書の生(なま)の観察を通して自身で修得すること。

⑪銅版画美術(Kupferstecherkunst)・木版画美術(Holzschnidekunst)

- ・若干の知識があれば喜ばれる。

⑫図書館学(Bibliothekswissenschaft)

- ・図書館員が根本から理解すべき本来の専門科学。その進歩を注意深く見守り、できれば自らも取り組むべきもの。

⑬筆跡(Handschrift)

- ・自分自身のためにではなく、利用者のために、今日、明日のためにではなく、未来にわたる利用のために書いているのである。間違いは書誌的混乱を生ずるため許されない。

5. 分析とまとめ

このようにグレーゼルは、図書館員に要求される特性として①～⑬の項目を挙げている。第1グループについては、100年後の現在と言わず、いつの時代でも必要とされる図書館員の資質であろう。③の「人間愛」は抽象的な表現であるが、

日ごろの図書館員の親切で献身的なサービスが利用者との信頼関係を醸成し、止むを得ない時に利用者に快く了承していただくことをも可能にする力を備えている。例えば、年1回の蔵書点検(棚卸し)作業中に利用を制限せざるを得ないこともあり得るのである。

第2グループの④記憶力については、あらゆるものが量的・質的に大転換を遂げた21世紀の時代にあっては、通用しないのではなかろうか。「常にメモをとるよう」な図書館員こそりっばと言えよう。大事なことは「記録」し、それをスムーズに関係者に「伝える」仕組みを確立することである。同様に⑥知識・学識についてもデータベースやインターネットの時代では個々の情報ではなく、その情報の探し方やそれらを利用しての問題解決の手段・方法に習熟することが重要と考えられる。「百科事典的な知識」についても同様に時代が違うと言えるであろう。ただ情報化社会となり、溢れんばかりの個々の情報に囲まれながら、それらに関連付け、総合化する能力、即ち、本質、部分、境界および共通点について認識する能力については、社会全体が未だ成功しているとは言えないのではないだろうか。しかし、この総合的視点の確保こそ現在最も必要とされるものと考えられる。

第3グループは個別的な学問・技能であるが、⑦語学については、ヨーロッパと違って日本において、ここまで厳しい要求は無理であろう。グレーゼルの時代は、1876年までは館長・副館長は勿論、第一司書・第二司書(Kustos)も教授の肩書を持っており、この伝統はドイツの学術図書館(Wissenschaftliche Bibliothek)に流れているものである。ギリシャ・ラテンの古典語は勿論、その他にも複数の言語を習得していたと考えられる。現在の日本で要求できる範囲としては、英語

のほかに一言語をマスターし、さらに文法書や辞書の助けを借りて数か国語で書かれた本の分類や目録が処理できればよしとせねばなるまい。⑧歴史と⑨文学史は基本となる学問であり、司書たるもの主要な国の歴史や文化については知っておくべきであろう。「歴史」についてエーベルトは「学問の中の学問・・・人生そのものの基礎となり規範となる学問である」14)と言っている。⑩古文学書学、古書体学の必要度は館種によると思われるが、「書誌学」は図書館学と密接な関係を持つ学問でもあり、予備知識程度は備えておくべきであろう。⑫図書館学については、これこそ図書館員の専門科学であり、社会の流れ、情報技術の進展を視野に入れながら日夜奮闘すべき学問である。⑬筆跡のことは、ペンや筆が今やキーボードに変わりつつある現代では、指にタコをつくりながら、一心不乱にカード目録を書く時代は終わってしまった。

グレーゼルの挙げる図書館員に求められる特性や資質を列挙し、ささやかな評価を試みた。時代を超越して図書館員の核となるもの、もはや時代的に重要度が薄れつつあるものも見られたが、ここで現代に即して新たに加えるべきものに「情報技術教育」がある。学問名が「図書館学」から「図書館情報学」に変更されて久しいが、IT技術の急速な進展により図書館の現場も一変してしまった。図書館で扱う対象も、「図書館資料」から「情報資料」へ、そして今や「情報資源」へと変貌している。このような環境で目的を達成するために働く図書館員の基盤となる能力に「情報技術教育」が必須であることは火を見るより明らかであろう。ここで僭越ながら⑭番目に「情報技術教育」を追加しておきたい。

6. おわりに

グレーゼルの挙げる図書館員の特性・資質を読

んできて、何か気になる感じを持つのは筆者だけであろうか？ 既にエーベルトの『司書の自己修練(Die Bildung des Bibliothekars)』15)を読まれた人には、そのあまりの類似性に驚かれたのではないだろうか？ 類似というより全く同じものと言っても差し支えないであろう。わずかに違う点があるとすれば、エーベルトが「司書の倫理」16)の項で述べている「自己犠牲的な親切心と奉仕精神」を「勤勉さ(Fleiss)」や「人間愛(Humanitaet)」という、口語的あるいは標語的表現に書き換えた部分だけである。しかしグレーゼルの引用した場合には必ず原著者名を一度は挙げており、現代のわれわれが言う剽窃・盗作の類では断じてないであろう。サイエンスの分野における著作権・特許権等の厳しい現代と比較すべきではなく、当時としては普通に行われていた慣習であろう。さらにエーベルト一辺倒でもなく、図書館界でも屹立した人たちの意見を取り入れて、さらに思想を膨らませているのである。「ミルカウの手で大成された Handbuch der Bibliothekswissenschaft.1931-33. 3 Bde. と、G. ライによって再編されたその第2版、1950-61. 3 Bde. はまさしくドイツ図書館史上の最高峰であるが、1902年に刊行された A. グレーゼルの Handbuch der Bibliothekslehre. は上記2者の先駆であり、今世紀の冒頭にドイツ図書館学に新世紀をもたらした。それはミルカウ図書館学のための設計図であったし、同時に M. シュレッチンガー以来約1世紀間のドイツ図書館学の集大成でもあった。」17) 河井氏の「A. グレーゼルの生涯(1)」の冒頭の記述が、この間の経緯を物語っているかもしれない。人文系の学問はこのようにして進化していくのであろう。

グレーゼルの『ハンドブック』について、もう一つ付け加えるべきことがある。その「注及び文

献紹介」の豊富さである。「これまでのドイツの図書館学文献は、単行書は殆んど注をもたず、あってもきわめて僅かであった。詳細な文献紹介は *Anzeiger* 18) など雑誌の任務とされ、単行書で改めてとりあげられることはなかった。こういう伝統を破って、おどろくほど豊富な注、文献紹介を持つ本書が突如あらわれたので、ドイツ図書館界はこれに瞠目したのである。」19) と河井氏も指摘しておられる。ちなみに、この『図書館学ハンドブック』第2章、第1節は、11 ページで、「本文」252 行に対して、「注及び文献紹介」181 行と尋常な量ではない。脚注方式で「本文」の真下に印刷されているため、注意を引いた時点ですぐに参照できる強みがある。

論述の不足を補うためにグレーゼルの『ハンドブック』第2章第1節の訳文を最後に掲載する。当時の図書館員の情熱が吐露されている。

注・引用文献

1) エーベルト Ebert, Friedrich Adolf (1791-1834)

ドイツの図書館学者、ドレスデン王立公共図書館長。図書館学を「整理学(Einrichtungskunde)」と「管理学(Verwaltungskunde)」の二つから構成されるとした。主著: “Die Bildung des Bibliothekars (司書の自己修練)”, 1820. “Allgemeine bibliographisches Lexikon (総合書誌事典)”, Bd.I-II, Leipzig, 1821-30.

ルーテル派牧師の家に生まれ、「他人の世話をし、私は疲れ果てる」をモットーとするストイックな図書館人であった。

2) 前掲, 1) エーベルトの図書館員論。河井弘志編訳『司書の教養』京都大学図書館情報学研究会発行、日本図書館協会発売、2004, pp.7-39.に「司書の自己修練」として収録されている。

3) シュレッティング Schrettinger, Martin

(1772-1851)

ドイツの図書館学者、バイエルン王立宮廷図書館副館長(1823)。神学校を出て修道院へ、そこで図書係となり、独学で図書整理をマスターする。主著: “Versuch eines vollstaendigen Lehrbuchs der Bibliothek-Wissenschaft oder Anleitung zur vollkommenen Geschaeftsfuehrung eines Bibliothekars in wissenschaftlicher Form abgefasst, (図書館学教科書試論)” 4 Hefte, Muenchen, Lindauer, 1808-1829.

彼は、上記の書で世界で初めて「図書館学(Bibliothek-Wissenschaft)」という用語を使用した。

”Handbuch der Bibliothek-Wissenschaft, besonder zum Gebrauche der Nicht-Bibliothekare, welche ihre Privat-Buchersammlungen selbst einrichten wollen. (図書館学ハンドブック)” Wien, Fr. Beckschen Universitaets-Buchhandlung, 1834, 187SS.

4) 『教科書試論』論争は、エーベルトの”Ueber oeffentliche Bibliotheken ... (公開図書館について、等)”, 1811. をシュレッティングガーが批評したことから文通が始まり、19 歳年長のシュレッティングガーに、エーベルトが教えを乞うという関係にあった。それが『教科書試論』第1・3分冊(1808-1810)発行後、10年を経過してから、突然、エーベルトは”Jenaische Allgemeine Literaturzeitung (イエナー一般学芸新聞)”, Nr.70 u. 71, April 1821. に『教科書試論』への酷評を掲載したのである: 図書館の定義がおかしい、「構成が間違っている」「必要もない事柄に好んで証明や反論を行っている、うんざりするほどの冗長さや誇示癖」図書館学の定義が「整理」に限定され、「日常の業務に欠けてはならないもの、つまり「管理」の原則を、著者はすっかり見落としており・・・」

「第3巻は分類目録を扱っているが、・・・前2巻と甚だしい矛盾に陥っている。」
これに対してシュレッティンガーは1822年『反論』を自費で出版した。1829年に出版された『教科書試論』改訂版の第2巻に、出版が遅れていた第4分冊と、第1-3分冊の補足・修正分、及び、この『反論』が含まれている。第4分冊には、エーベルトが欠落を指摘した「図書館の維持・管理部門」が含まれている。
エーベルト、F.A.「エーベルトのシュレッティンガー批判」三宅 悟、河井弘志訳、『芸亭』第23号、1983, pp.1-17.
シュレッティンガー、M.「シュレッティンガーの反論」三宅 悟、河井弘志訳、『図書館学会年報』Vol.30, No.2 (June), 1984, p.81.
「シュレッティンガーの反論 (続)『図書館学会年報』Vol.30, No.3, 1984, p.141.
5) 小倉親雄「ドイツにおける図書館学思想の形成とその起原」『図書館界』Vol.23, No.3, 1971, p.85 左。後半の () 内は『教科書試論』についてではなく、『ハンドブック』への感想である。
6) 河井弘志「A. グレーゼルの生涯 (1)～(5)」『図書館界』Vol.25, No.4 (1973.12), Vol.26, No.1 (1974.5)～Vol.26, No.4 (1974.12)
7) Graesel, Arnim “Handbuch der Bibliothekslehre (図書館学ハンドブック)”, Leipzig, J. J. Weber, 1902.
Petzholdt, Julius “Katechismus der Bibliothekslehre (図書館学入門)”, 3. neu durchgesehene Auflage. Leipzig, J. J. Weber, 1877, xii, 231S. を改訂したのが、“Grundzuege des Bibliothekslehre mit bibliographischen und erläuternden Anmerkungen (図書館学の基本的特質: 書誌及び解説付き注)”, 1890. さらにこれを改訂したのが本書『ハンドブック』である。

8) クリストフ・シャルル/ジャック・ヴェルジエ『大学の歴史』岡山 茂、谷口清彦訳 白水社、2009. (文庫クセジュ) p.93.
9) 前掲, 8) [p.156 の次のページ: ページ付けなし]
10) 前掲, 6) 「グレーゼルの生涯 (2)」『図書館界』Vol.26, No.1 (1974.5) p.8 左
11) 前掲, 10) p.10-12. 「記名員(Signator)は、常に補助職員の上、第二書記の下とされており、いわば主席補助職員に該当し、補助職員の中から輪番で出され、通常は新たに補助職員に加わった者が暫時主席をつとめる慣習があったのではないと思われる。」
12) 前掲, 7) グレーゼルの生涯は、ペッツオルトの編集する雑誌 “Neuer Anzeiger (新・図書館学文献通報)” (Anzeiger 改題) に「書評」を寄稿していたので親交が生まれ、今回の改訂出版の流れとなったのであろうと河井氏は見ている。
13) 前掲, 7) “Zweiter Kapitel : Von den Beamten der Bibliothek, Erster Abschnitt : Der Bibliothekar in allgemeinen” SS.153-163.
14) 前掲, 2) 『司書の自己修練』p.13.
15) 前掲, 2)
16) 前掲, 2) p.31.
17) 前掲, 6) 「A. グレーゼルの生涯 (1)」『図書館界』Vol.25, No.4 (1973.12) p.153 左
18) ペッツオルト編集の『図書館学文献通報』は、下記の通り、度々改題している。
“Anzeiger fuer Literatur der Bibliothekswissenschaft, 1841-1845”
“Anzeiger der Bibliothekswissenschaft, 1846-1849”
“Anzeiger fuer Bibliographie und Bibliothekswissenschaft, 1851-1856”
“Neuer Anzeiger fuer Bibliographie und

Bibliothekswissenschaft, 1856-1886”

19) 前掲, 6) 「グレーゼルの生涯 (2)」『図書館界』Vol.26, No.1(1974.5) p.18 右

Handbuch der Bibliothekslehre / Arnim Graesel. – Leipzig : J. J. Weber, 1902.

図書館学ハンドブック / アルニム・グレーゼル, 1902

第2章 図書館職員について

第1節 一般的な図書館員

図書館員について、広義には、図書館学を修めた者と理解されている。しかし一方では、図書館学において定められた業務に職務として取り組んでいる者にのみ与えられるものという、狭義の図書館員という名称になじんでもいる。実際には、他の職業のやり方と同様に、最初に正式な概念説明がなされ、次に図書館員という称号は、しばしば図書館の指導的な職員として認定された場合のみ、あるいは、その館における少数の学術的な職員を顕彰する場合に授与されるといった、さらに別の意味があることを知ることになる。しかしそのような限定的な用法は、以前の時代の図書館員には適合しないし、一般的にも考えられなかったであろう。それゆえ、近年、プロイセンにおいて定職としての地位に図書館職員が達することができたこと、また図書館員という名称が公に与えられたことは喜ばしく、満足できることである。同時に[図書館員の]基礎教育の問題、明確な規定に基づく給与や年功条件を理解した上でやっと図書館員の身分について、また自立した図書館員という職業について語ることができるのである。以前は、大学図書館では特に、重要な職務上のポストは、（当該大学の講師を経験した上であり、）通例、兼職であった。しかし、今日では、図書館員の職務もまた、他の全ての責任の重い職務と同様に「全身で打ち込める人(einen ganzen Mann)」、即ち、第一線でこの職務をやり抜き、これらの

業務に最高の力を発揮できるような人物を必要としているということについては、もはや何の疑念をさしはさむ余地もないのが現状である。いずれにせよ、図書館の機能に対して、あらゆる観点から出されてくる、高まる要求は、これらの能力あるスタッフの恒常的な強化を要求することになる。

一図書館員に対して要求される「特性(Eigenschaften)」としては、その館員が職務を普通にこなしていることを前提に、とりわけ備えていなければならない美德として、「秩序愛(Ordnungsliebe)」「勤勉さ(Fleiß)」そして「人間愛(Humanität)」がある。奇妙に思われるかもしれないが、図書館員の最も中心となる必要条件として強調されている特性は、また図書館員以外の公務員についても、彼らがどのような状況で働いていようと、その特性の修得について暖かい気持ちで推奨できるものである。図書館の仲間たちの中の、何らかの展望をもっている者で、あの三つの特性が正に図書館員にとって他の多くの特性に比べて不可欠のものであることを否定できるものはいないであろう。例え、まずまずの図書館員との評価がなくとも、それらの特性は、図書館員の素養としてほとんど必要不可欠のものであり、一方、既に博學な図書館員であっても、あの特性を欠いている図書館員は、図書館の目的からすれば、全く役に立たないも同然である。

先ず「秩序愛」に関して、エーベルト(Ebert) 1) が、ベテランの図書館員との確実に一致した考えとして言うには、「厳格な秩序愛を知らない者、あるいは、なじみのない者は、良き図書館員として最も必要で不可欠な素質の一つを欠いており、ちっぽけで、つまらないことにも最大の精確さと秩序が要求されるこの職務には、完全に無能である。」そしてフェルステマン

(Foerstemann) 2) は言う、「全ての図書館学の権威者たちは、今や次の点で意見が一致している。即ち、この職務に関する主たる必要条件は、学識ではなくて秩序愛である。かなり知識に不足がある者でも、まずまずの図書館員になることはできるが、だらしのない人間が、この職業で何とかやっていけるなんてことはあり得ない。」

「秩序」は、それぞれの図書館の管理にとって、真に主たる基盤を形成するものである。図書館が十分に整備された施設で、かつ正に最高のものであっても、この「秩序」がなければ、館員があらゆる学識を備えていても、正しい隆盛に達することはできないし、図書館員に対して正当に要求される、あの充実した有効なサービスを発揮することもできないであろう。

しかし今後はさらに「秩序愛」と「勤勉さ」が連動されねばならない。図書館業務では、別の場所ではこのようなやり方を要求されることはあり得ないような根気のいる「勤勉さ」を、往々にして全く退屈至極な事柄で要求されるものである。天性の労働意欲や労働の喜びの発露としての倦むことのない「勤勉さ」をこそ、取るに足りない仕事においても、担当するよう指定された、より重要な仕事と同様に同じ入念さを分け合うような、几帳面な誠実さを根底に置かねばならない。同時に図書館員の全ての業務において、模範的なやり方によって最大の精確さ、丁寧さ、明快さが、常に効果を発揮せねばならない。しかし、全てこれらの必要条件に対しては、第一の前提条件として、図書館員のその職業についての純粋で真実の愛情の如何にかかっている。というのは、彼がどんなに熱心であろうと、どんなに活動的であろうとも、彼がその学術的な仕事のために道をつけた、その苦心の結果は、基本的には他人の役に立つものと

なるからである。当然のことながらハルトヴィッヒ(Hartwig) 3) は言う。「図書館員として働いている同僚たちのもっている学術的な欲求こそが、他の職業ではほとんどあり得ないものである。」その際、概して言えることは、当今なお慎重深いというのが図書館員の外見上の姿勢である。エーベルトの的確な次の言葉は依然として有効である。「一方では、ゆったりとして快適な、大変楽しい仕事があり、他方では、輝かしい、どよめくような称賛と承認を受ける仕事が存在するが、図書館員は、なされた仕事に対する感動的ではあるが、冷静な感情の中に、その仕事の唯一の報酬を見い出さねばならない。」

最後に第三番目の要件、これは図書館員がある確実な完璧さへと導かれねばならぬ「人間愛」である。これは重大な意味のために、特に利用者と向き合う位置にあるものである。申し分のない、熟練した人との接し方、自然な礼儀作法、そして常識や素晴らしい教養と結び着いた真の人間愛や親切なサービスは、図書館員に関する限りは、疑いもなく最大限に利用されるべき、図書館の目的達成への原動力である。利用については、展示されている収集品の中に価値のある宝物があらうと、素晴らしい排架整備がなされていようと、一度、あの要件を備えた図書館員が職を離れることがあれば、人間愛を欠いた職員たちによって、一部の利用者たちは図書館へ行く気を失くさせられてしまうことがある。それゆえ図書館員に対しては、当然、次のような要求が許される。即ち、図書館員が自分ののかかえている仕事と調和させながら行う限りにおいては、利用者は図書館員に丁寧に申し出て相談に乗ってもらうことができる。あるいは、デ・ウセ(Des Houssayes) 4) が述べているように、図書館で働く者は、全ての利用者に対して、その一人ひとりへの対応の模様が純粋に個

人的な親切さの発露であるような、根気の良い、丁寧で親切な心遣いを持って応対すべきである。このようなやり方で図書館の評判を上げれば、最も効果的にその館の利用を促進することになる。図書館員の職務においては、利用者に対してもしばしば大きな犠牲を求めることがあるが、これが常に快く、喜んで受け入れられるためには、人間愛だけがそのやり方を可能にする。これらの資質に欠けている者にとっては、図書館へのあらゆる愛情や思い入れに基づく職務というものは、耐え難い重荷となるかもしれない。

これらの三つの特性のほかに必要な不可欠のものとして第一番目に挙げられるものに、天性の図書館員に備わっている抜群の「記憶力 (Gedaechtnisse)」がある。図書館業務において発生する種々様々の細かい事柄を把握するために備忘録として常にメモをとるような、確かな記憶力を備えていない図書館員は、誠に「大変、残念な人物」であり、それほど骨の折れる仕事でなくてもすぐに悩み多き人生となるであろう。さらに図書館員は健全で自立した「判断力 (Urteil)」を持たねばならない。特に分類目録の作成の際や有用な図書を新たに調達する場合の選択の際に。そしてついには、彼にとって図書館が真に本来的な意味で好ましいものとなり、彼をして古書目録を利用するほどになるだけでなく、力の及ぶ限りその館に欠けた部分を補完するために新たな入手を考え、それでもって常に完全な全体像を作り上げたいと考えさせるような、確かな「収集熱 (Sammeleifer)」を生じさせる書物への愛を持たねばならない。

われわれが良き図書館員の備えるべき最も重要な資質についてさらにくわしく考察を加えた結果、注視すべきものとして「知識 (Kenntnisse)」がまだ残されていた。いつの時代でも図書館員については非常に過度の要求が

なされており、実際にその要求は、図書館員はまさに博識家であらねばならない、というものであった。しかし新しい時代の学問は桁違いの拡大と深化を遂げており、これを良く明らかにできるような博識家は、もはや今日では存在し得ないであろう。そして現代でもなお博識家が存在し得たとしても、それは決して図書館員の職務に対して必要不可欠の要素とはならないであろう。これに反して、また一方では図書館員の職務を見くびるような大変不当な扱いが成されており、そうしなければ採用されないの、それぞれが任意の学者に気に入ってもらうように合わせている、という風にも考えられていた。これは全く実情とは違っている。この職務は、広く、根本的な「博識 (Gelehrsamkeit)」を備え、過去および現代の文芸的な作品の保護に習熟した人、これは絶対に欠かせてはならないものだが、これらのことだけではなく、部分的には図書館学校のような所で、一人で長年の修練を経て身に付けるほかはないような、全く特有の準備や教養をも必要とするものである。図書館は図書館員にとって本当の意味での大学になっている。

とりわけ各図書館員に対しては、当然のことながら十分な「百科事典的な知識 (encyklopaedische Kenntnisse)」を蓄えていること、全学問体系への展望を持っていることが要求される。図書館を訪れる人に対して目立つ存在で、専門学者のように話することができるようになりたい、また教員の一員でありたいと願うのではなく、エーベルトも話しているように、人類の知識のそれぞれの専門分野に対して、同じ敬意と関心を持ちたいのである。そうでなければ収集においても、ともすれば悲しむべき偏向の罪を犯しかねないことになるだろう。本質 (Wesen)、部分 (Teile)、境界

(Grenzen) に関する基本的な知識と学問における様々な共通点(Beruehrungspunkte)を知ることが、図書館員にとって望ましいことである。というのは、整理業務においては毎日、毎時間、それらは必要となるものである。図書館員にとって、その他の全ての知識については、百科事典の中にその必要不可欠な結合点を見い出すであろう。

百科事典に次いで主要な必要事項は、「語学の知識(Sprachkenntnisse)」である。全ての図書館員がメッツォファンティ(Mezzofanti) 5) のような語学に関する天賦の才を備えていないとしても、学術的なコレクションの中で扱っている代表的な作品の大多数に対して、主たる文化圏の言語については、十分な知識を持つことがどうしても必要とされるであろう。大学での勉強に必要な古典に関する学校教育のために書かれた文学的な代表作を、ギリシャ語とラテン語という二つの古典的言語により理解する力や大規模な図書館ならおびただしい数の印刷物を所有しているはずのフランス語、英語、イタリア語の分野に関する知識が、図書館員の必要条件の中に含まれねばならない。しかしこの要求は、図書館員がこれらの言語を見事に物にして活かせるほどの状態にあるべきであるというほど高い水準のものではない。文献が読めれば十分であるが、その図書館員がさらに別の言語でそれを流暢に表現できるならば一層称賛に値することになる。その他のヨーロッパの言語に関しては、特定の地域に関して高い要求があるのではなく、図書館員が文法書や辞書の助けを借りて見当がつけられたり、一瞥するだけで必要なことを充足できる知識が得られれば十分である。その代わりに東洋諸語の知識については、ヘブライ語に関して、ほんの表面的な知識ではあるが、ある程度はわかるという例外つきで、

大目に見てやることも可能である。いずれにしても規模の大きな図書館では、東洋学に対しては、特別に素養のある職員が配置されている。

その上さらに図書館員に必要とされる知識には「歴史(Geschichte)」が数えられる。その図書館が属している国の全体的な歴史と個々の特定の分野の歴史、それと同時に「文学史(Litteraturgeschichte)」の全体像が含まれる。古い時代あるいは新しい時代の個々の国家的な構築物の成立、隆盛、そして衰退に関する文献的なこれらの記念碑の保存者である図書館員にとって誠実で慎重な歴史研究が不可欠であることは明白であり、図書館がその歴史的な容器である学術史の研究の必要性については、なお一層間違いないことである。特にここでは現在好評を博している、「古文書学(Diplomatik)」と結びついた「古書体学(Handschriftenkunde)」の研究や「書誌学(Bibliographie)」がとりわけ重要である。確かに図書館員が、その職務に第一歩を踏み出す際に、古文書学や書誌学についてかなりの実際的な知識を同時に備えていることは滅多にないことではあるが、そのためにもこれらの学問についての善き理論的な予備知識を備えていることが前提とされなければならない。これらの知識についての実際的な専門教育は図書館にある写本や図書の生(なま)の観察を通して自分自身で修得しなければならない。モールベック(Molbech) 6) も言い当てているように、実際的な図書の知識、書誌学や図書学の多くの様々な側面について熟知していること、素質と器用さ、特定の国や特定の図書館の極めて重要な要素についての文献的な知識を用いるためには、図書館員がこのために長く、辛抱強い実際的な活動を通じて修行することなしには決して到達することはできない。これらのことが職務に就

いて、そんなに早い時期ではなく行われるならば、「図書印刷(*Buchdruck*)」の発展の歩みに習熟したり、図書の製作や「製本(*Einband*)」に関係のある全てのことを、かれの知識の範囲に取り込んだりするチャンスにもその職務の中で出会えるであろう。その上さらに「銅版画美術(*Kupferstecherkunst*)」や「木版画美術(*Holzschneidekunst*)」に関する若干の知識があれば、その職にとどまってもらうに越したことはないということになるであろう。というのは銅版画や木版画のコレクションも図書館にその管理をまかせられることもそう珍しいことではないということとは別としても、いずれにせよ沢山の書籍からなる基本的な蔵書の一部として、より綿密に考慮されねばならないことである。

結 局 の と ころ、「図 書 館 学(*Bibliothekswissenschaft*)」の研究、特に「図書館の教義(*Bibliothekslehre*)」こそが、第一線の図書館員にふさわしい課題であるのは自明のことである。図書館学は、図書館員が根本から理解しなければならない本来の専門科学であり、その進歩を注意深く追究せねばならない。できることなら自ら熱心にかかわっていくべきである。これに対して以前から考えられていたその他の学説には、「準備学(*Vorbereitungswissenschaften*)」や「補助学(*Hilfswissenschaften*)」として有用なものがある。今日では個々の問題から、いわゆる全ての学問を一様に扱うことは、もうほとんど不可能であることは、勿論強調されねばならない。それゆえにオスカー・マイヤー (*Oskar Meyer*)⁷⁾ が既に強く主張しているように、ある種の分業を採り入れることのできる、規模の大きな施設に委ねることになる。即ち、ある者は広範囲にわたる言語の知識を習得していることで不可欠の存在であり、また別の者は、古い

印刷術の研究について担当することができ、また別の者は、いわゆる図書館経済学(*Bibliothekswirtschaft*)と好んで呼ばれている分野を専門的に研究しているという風にある。

一見したところ重要とは思われないことで、それどころか実際にはかなり大事なことで、つまり図書館員の「筆跡(*Handschrift*)」の状態のことであるが、このことに気付いてもらうまでは、この章を終えるわけにはいかない。上手で明瞭な筆跡は、個々の図書館員にとって望ましいというより、必要不可欠のことである。そしてこれが備わっていない人は、図書館員として職務に就く最初の段階で、そのことを些細なことと見なさないで、少なくとも後で補って修得して欲しい。というのは、図書館員は、図書館で自分自身のためではなく、公衆の[利用の]ために書いているのであり、また今日、明日の[利用の]ためにではなく、ずっと先の未来の[利用の]ために書いているのである。しばしば混乱を惹き起こす原因となる間違いが発生することがないように、誰もが書かれたものを容易に読み取れる状態であらねばならない。

(訳・石田俊郎)

訳注

1) エーベルト Ebert, Friedrich Adolf (1791-1834)

ドイツの図書館学者、ドレスデン王立図書館長。
本論 注 1) 参照

2) フェルステマン Foerstemann, Ernst Wilhelm (1822-1906)

ドイツの言語学者(博士)、ドレスデン王立公共図書館長。グレーゼルが編集員であるハルトヴィッヒ館長の図書館専門雑誌 "ZfB" に寄稿していた。著書: *Die deutschen Ortsnamen*, 1863 (ドイツ地名学)

3) ハルトヴィッヒ Hartwig, Otto

(1830-1903)

ドイツの神学者・哲学者(博士)、ハレ大学図書館長(1876-1898)。1884年専門雑誌”Zentralblatt fuer Bibliothekswesen(図書館中央雑誌: ZfB)”を創刊。同大学図書館のグレーゼルを編集員に加えた。

4) デ・ウセ Des Houssayes, Jean-Baptiste Cotton (1727-1783)

フランスの神学者(博士)、ソルボンヌ社団・司書監(conservateur)。ノーデ(Gabriel Naude, 1600-1653)の思想的後継者といわれている。

5) メッツォファンティ Mezzofanti, Giuseppe Caspar (1774-1849)

イタリアの博言家、枢機卿、ボローニア大学アラビア語教授。57カ国語を知り、12カ国語を話したという。(岩波西洋人名辞典)

6) モールベック Molbech, Christian (1783-1857)

デンマークの図書館員、コペンハーゲン王立図書館司書長、1829年コペンハーゲン大学文学史教授。エーベルトの図書館学を支持・推奨し、その論は「エーベルト=モールベック組織法」と命名されている。

7) オスカー・マイヤー Meyer, Oskar

フェルステマンと同様に”ZfB”への寄稿者。グレーゼルの『ハンドブック』のとりわけ詳細な文献紹介を評価して、すぐれた「図書館学便覧(Compendium der Bibliothekslehre)」だと称賛している。

・訳出したテキストは、京都産業大学図書館を通じて、ILLサービスにより奈良女子大学図書館より借用したものによることを付記し、御礼の辞に代えさせていただきます。